

---

## カアディスからの手紙（115）

2006年7月21日

---

暑中お見舞い申し上げます。

暑いのはさほど苦にならないRもこのところ吹き続きのレバンテ(levante=東風)、即ち内陸からの熱風には参ってしまいます。こんなことは去年のカアディスでは全くありませんでした。スペイン内陸部は南も北も軒並み40度以上です。ビスケイ湾に面して冬の厳しさでは定評のあるバスコ地方も40度を越える暑さで、このところ連日TVニュースのネタになっています。

そんな中ではカアディスの暑さなど知れたもの、今日(18日)、正午、近くの海岸通りの電光掲示板では気温32.6度、湿度30%(これは眉唾)となっていました。普段のカアディスなら正午近くには確実にシー・ブリーズが吹き始め、低い湿度のおかげもあって日陰ではヒンヤリ・ヒエヒエなのです。この内陸風が吹き始めて既に10日を超えました。モロッコに低気圧が居座っているためです。正に異常が平常になってしまったという気象でしょう。

この暑い中で、なおのこと鬱陶しいのは今週明けから道路のあちこちにゴミの山が出現していることです。どうやらゴミ回収班と市当局がもめているらしい。去年の夏、ヨソの都市、例えばグラナダなどでゴミ回収拒否の長期ストがあってTVニュースをにぎわしていました。カアディスが本当に深刻なストになるのかどうか知りませんが、海水浴客、バカンス客が押し寄せるこの時期、ゴミの回収がされないといひどいことになります。幸い我が家は10階だし、目に入る場所にはゴミ回収ボックスもないので実害はありませんが、気になるところです。

こんなことは、さっさと市の業務からはずして民間に委託してしまえばどうかと思いますが、ナカナカそう簡単にことは運ばないのでしょう。このことに限らず、この国はこれから暫くの間、国営・公営事業の民営化が大きな課題になるであろうことは私達のようなヨソモノの目にも歴然としています。

去年、スペインでは、国営造船所が大モメにもめた後分割されたばかりですが、その時の紛争はマダマダ尾を引いていて、今日のTVニュースでもセビージャでの造船所従業員のデモが取り上げられていました。

国際競争に直接さらされる造船業などが旧態依然の国営事業ではとても成り立たないことは当然過ぎるほど当然。国営会社従業員の意識の低さは目を覆いたくなるほど

でデモのやり方も到底一般の賛同を得られるようなものではありません。それに気付いていないのは当事者のみ、というところにやりきれなさを感じます。

どこの国でも国・公営事業の分割民営化には従業者の大きな抵抗と政治屋の賛否両論が渦巻き大きな社会問題となりますが、多くの国・公営事業を抱えるこの国ではこれからその整理・民営化が現革新党政府の大きな課題になることは確かでしょう。

去年、一時帰国したとき、いくつかの小荷物を郵便局から発送しましたが、その折、日本の郵便局はサービス良くなったナー、という印象を強く持ちました。それは私達に2年半のブランクがあったためばかりではなく、スペインに移住を決めた4年前にも既に殆ど同じ印象を持っていました。郵政民営化政策の効果の一つはハッキリ出たと言っているのではないのでしょうか？ 皆さんはどうお感じですか？

さて、今日はその郵便事業のお話から・・・。

\*

---

## 「コレオスの怪」の巻

---

コレオ *correo* と単数で言うと郵便または郵便物。コレオス *correos* と複数になると今日のテーマ、郵便局のことです。例の、Nの苦手なダブルrの綴りです。先週、休暇をとって最後のカァディス訪問にきていたnに聞くと彼女もrrの巻き舌が出来ないらしい。子供は母親の口真似で言葉を憶えるといえますから、成人してからの話し方は別として発音などはそのまま受け継いでしまうらしい。

まさしく *mother language* または、*mother tongue* ですね。

先日来、私達が帰国準備を進めていることはご承知と思いますが、6月1日を皮切りにこれまでに10個のダンボール箱を発送しました。これからも多分同じ位の量を送らなければならないでしょう。その中のいくつかはnに引き取ってもらう本や食器などもあるのでイギリス向け発送もあります。

さて、今日は、この10個を送るに際して一度として郵便局の扱いが同じだったことがナイ、というお話。7個目と8個目、9個目と10個目は夫々2個を同時に発送しましたから正確には8回郵便局に足を運んだのです。二つの郵便局で延8人の局員に接したわけですが、その間、大勢の異なる局員に当たりました。

そして、その殆どの場面で私達の荷物の扱いが違ったのです。

まず最初に、去年、友人宛に発送した時の話です。

私達のピソから一番近い郵便局コレオス・サン・ホセに行った時の事。その時、私達はこの土地の人が殆どヒルネをむさぼっている午後一番暑い盛りに荷物を持ち込み

ました。なぜなら、その郵便局には順番を決める番号札の設備がなかったから。

郵便局に限らず、番号札のない所では複数の窓口が開いていたら、一列に並んで、先頭の人から順に空いた窓口に進むことが常識ですね。いわゆるフォーク並びです。ところが、スペインの人、特にオバサンがそうですが、この並び方が甚だ下手な、というかそういう並び方を出来ない、またはシタクない人が実に多いのです。

初めはおとなしく列の最後尾についたように見えても、油断が出来ません。列の前の方に知った人などを見かけたらコレ幸い、列の後ろから声をかけます。アーラ久し振りネー、なんて調子。その内ジワジワとその前方の知人に近づいて、気が付くといつの間にかちゃっかりその後ろに溶け込んでしまう。これがどうにも腹立たしい。

そしてもっと腹が立つのは、あとから入ってきて、大勢が並んでいるのを尻目に、つかつかとタイミングよく空いた窓口に進み、イキナリ自分の用を済ましてしまう人。これは圧倒的に若い女性に多い。オバサンも元は女性ダッタらしいから、このフォーク並び、多分スペイン女性には向かないのでしょうね。

不思議なことにこういう不心得な人にビシッと注意を促すことがないのです。窓口の局員は明らかに列を無視した人は分かるはずなのに、列の最後に並びなさい、と注意をするのを聞いたことがありません。おとなしく列に並んでいる人も、エツという顔はするものの、みんな並んでるんですヨ、とはっきり注意する場面を知りません。勿論、あとから入ってきて、最後尾の人に ¿Es ultimo? (列の)最後ですか? と聞いてその後につく、当たり前の人も数多くいることを付け加えておきましょう。

とにかく、その郵便局では何度もそういう不愉快な目にあっているのです。なるべく其処は敬遠していたんですが、旧市街の本局までは4キロ弱、この局は1.5キロ、圧倒的にコッチが近い。荷物を運ぶには近いがイイに決まっています。そこで、シェスタの間ならすいているに違いないとワザワザ午後の暑い時間に持ち込んだのです。

\*

この狙いは、半分は大当たり、でも半分は大ハズレでした。私達が入ったとき郵便局には誰もいませんでした。客はもちろん局員さえも、です。でも、オーラと声をかけると奥からオッサンが一人出てきました。でも、この人が果たして正規の郵便局員かどうか甚だ疑わしい。

スペインでは鉄道でも郵便局でも窓口の職員が正規の職員なのかどうか服装では判断できません。銀行だって背広を着た窓口職員なんか見たことがないのです。ヨレたオープン・シャツなどが普通です。まあ、服装はともかく、そういう疑いがアタマをもたげるほど、このオッサンの荷物の取り扱いはおかしかったのです。

私達は事前に送り状に記入して持ち込みました。宛先・発送人・品名・内容物の重

量・宛先に届かなかった時の処置法など。こんなことすらもキチンとする人は少なく、殆どの方は窓口に行ってから用紙をもらい、色々聞きながら且つおしゃべりしながら書き込むのです。後ろの延々長蛇の列なんか全く目に入っていません。局員もその人をチョット脇にどけて、ハイ次の人ドーズ、とは言わないのです。その人の順番がきたら、時間はその人のもの、というわけ。

そのオッサン局員は段ボール箱を秤にかけました。そして私達が記入して行った内容物重量合計欄の数字を二重線で消して、其処にダンボールの風袋込みの総重量を書き込んだのです。アッ、コイツバッカジャナカローカと思いましたネー。だってその欄には peso neto(ペソ・ネット=正味重量)とプリントされてるんですよ。そして用紙の右半分は郵便局側が記入する欄になっていて、そちらにはチャンと局側が計った風袋込み総重量を書き込む欄があるんです。

そして、そのオッサンは、ここはコッチで記入する欄だから空けてオキナサイ、と、やや説教臭い感じで言うんです。でも、この欄は私が書き込むべきで、郵便局が書くところは右側の欄じゃありませんか？ そうではなくて、ここは郵便局が書くから・・・とスペイン人には珍しいネチッコさで、ラチが明きません。

分かりました、ヤメマス。えっ、ナニをやめるの。送るのをヤメマス。R持ち前の短気爆発。Nはマタか、と特にオドロキはしなかったけど、オッサンは驚きましたネー。いや、ここはモウ直したからコレでいいから。イヤッ、とにかく、もう、送らネーダヨ。箱をコッチへ返しナ、なんて乱暴な言葉は腹の内、しかし、断固、送らない、を繰り返したので、さすがのオッサンも箱を返してよこしました。

それからどうしたか？ 4キロ先の本局へ持ち込みました。送り状は書き直して、今度はオッサンに消された内容物重量合計欄は空欄にしたまま。本局で私達が当たったのは若いオニーサン。ここにはチャンと番号札の設備があって電光掲示板に自分の番号が表示された窓口に進む、極めてノーマルなシステム。

そして、オニーサンは秤で計った総重量をチャンと局側で書き込む総重量欄に記入して、エコノミコ(最も安い送り方=船便)でいいんですね、ペルフェクト(完璧)。

なーんだ、なんてことないじゃないか。グラシアス、アディオス。本局ではの右欄の総重量にのみ記入。そりゃそうだなオッサンが消した欄は自己申告欄で、送料課金はあくまで郵便局で計った右欄でするんだから。以来この自己申告合計重量は空欄のまま、何の指摘もされていません。一体あのオッサンはなんだったんだロー。

もう二度とコレオス・サン・ホセには行くまい。郵便物発送は本局に限るって・・・。以後、近くのコレオス・サン・ホセは素通り、4キロ離れた本局通いが始まったのです。ソレニシテモ、古人は良くぞいいましたネ、短気は損気。

と、まあ、そんなことがあった日くつきの郵便局。だから今回の帰国荷物はハナっから本局から発送することしか考えていませんでした。

\*

さて、ところが本局の方は本局でナカナカどうして色々あるんですネー。もっともコレオス・サン・ホセのようにアツタマにくることはなかったけれど、行く度に何かしら新しいことを教えてクダサル。ざっと次のとおり。

#### 一回目。

船便で送れる制限重量は20キロ。いい加減に見当をつけて箱詰めしていったのですが、郵便局の秤では約2キロのオーバー。これじゃ駄目だわねー、2キロ分何か取り出せる？ と、これは初めに重量制限を聞きに行った時のオバサン局員。爆発アタマみたいなド派手ヘアー・スタイルですが、対応は超マトモ。いえ、もう一度出直します。これははっきり当方の手落ち。ヤッパリ秤を買わなきゃだめかー。

#### 二回目。発送1個目。

別の優しそうなオバサン局員。箱に貼ったテープがマズイから、これを上から貼りなさいネ、と局のテープを貸してくれました。私達は大手引越し屋で段ボール箱・プラテープ・エアーキャップなどを買い込んで、それで荷造りしていました。そのプラテープには引越し屋のロゴが印刷してあります。それがマズイというわけ。郵便局が引越し屋の片棒担いでいるようで具合が悪いんでしょうね。ゴモットモ。しかも局のテープまで貸してくれるんだから文句は言えません。

#### 三回目。2個目。

今度は少し気難しそうな眼鏡オバサン。箱にも宛先を書きなさい、とマジックを貸してくれました。ハイ、これもゴモットモ。宛先不明で困るのは私達ですからね。

#### 四回目。3個目。

去年のとは違う、若いオニーサン局員。荷物も今度は問題なし。ペルフェクト！

#### 五回目。4個目。

今度も問題なし。前回に続いてペルフェクト。係りは一回目の爆発オバサン。

#### 六回目。5個目。

また三回目の気難しそうな眼鏡オバサン。三回目の時は言わなかったのに今度は箱に印刷してある引越し屋のロゴがイカンと言うんです。でも、私達に直せとは言わず、自分で局のプラテープを使ってロゴを隠してくれました。

でも、ヘンですよ。だってこれまで私達が使ってきたのは全部同じ箱ですよ。二回

目にテープのロゴはイカンと言われたからそれ以後は市販のロゴナシ・テープを使っていましたが、箱はずっと同じロゴ入りを使っていたのに……。テープのロゴがいけないんなら箱のロゴだっていけないのは理解できますが、それなら何故今までそれを指摘されなかったのか？

まあ、それでも、ここまでは良かったんですが、見ているとマジックで箱に英語で船便「SURFACE」と書いてくれちゃってました。アッチャー！ガッカリ。

実はこれまで大体週一のペースで発送してきたんですが、荷物を預かってもらうNの弟からは、①の箱が届いた、②の箱が着いた、③の箱が……。とその都度メールしてくれていました。私達は箱に続き番号を書いて発送してたんです。

ところがこれらはいずれもどう考えても航空便で行ったとしか思えない速さでした。しめしめ、この調子なら船便料金で全部航空便で行っちゃうかも知れない、と、ホクソ笑んでいたんです。でもSURFACEなんて大書されちゃ望みないナー。

色々と考えてみました。どうやらこれはこの郵便局が段々賢くなったわけではないかも知れない。ヒョットしたら日本の郵便局から、最近そちらからオカシナ荷物が来ているが、と通報があったんじゃないか？箱のロゴを隠したのも、SURFACEなんて書き足したのもこのオバサンの考えではないらしい。現にこのオバサン自身も三回目の時は宛先の事しか言わなかったんだから……。

\*

七回目。6個目。

本局がこれまで嬉しくも間違えて航空便で送ってくれていたのに、SURFACEなんて書かれたんじゃないじゃもうそれは期待できない。久し振りに河岸を変えて見ようじゃないの、と、例のコレオス・サン・ホセに行ってみました。

今度は局員もマトモなはずのシェスタ時間外、。当たった係はここでもオバサン。本局の三回目以来箱にじかに書いていた発送人と受取人のうち、これは要らない、と発送人の方はマジックで消されましたが、そのほかは箱のロゴもテープで隠しておいたので特に問題なし。でもヤッパリSURFACEと書かれてしまいました。

ウーン、通報はコッチにも回っていたか……。

ところが、それから10日後、またまた、⑤の箱が着いた、⑥も、とメールです。

ナーンだSURFACEなんて書かれちゃっても、結局誰も見てないんだ。

スペインからの船便が10日で日本に着くわけがありませんものね。

それ以後⑦と⑧はサン・ホセで、⑨と⑩は再び本局で発送しましたが、⑦⑧から2週間たった今、まだ、受け取った、というメールは来ていません。今度こそほんとに船に乗っているのかも……。と思ったハナから⑦⑧も着いたという知らせ。

\*\*\*

---

## 「最後のカアディスの夏」

---

冒頭で我にもなく暑い暑いとこぼしましたが、19日の今日、吹き始めから実に11日目にしてようやく暑いレバンテ内陸風がやみ、嬉しいシー・ブリーズの復活です。日差しはギンギラでも空気はカラッと涼しい夏、これこそカアディスの夏。その快適なカアディスの夏ともあと一ヶ月少々でお別れです。いよいよ去りがたし・・・。

今日は医療保険の解約手続きと電話の解約予告のため旧市街まで行ってきました。私達は民間の医療保険に加入しています。それが居住許可申請の際の必要条件の一つです。4年間一回も医療を受けたことがなく、毎月の二人分の保険料185ユーロ、約2万7千円は全くのタダ払いですが、これがなければ居住許可も下りないので、まあ、税金と考えると我慢するしかありません。一方では、住民登録をしているのに市県民税のようなものはないのだから不思議です。

とにかく、医療保険はもう不要になったので8月一杯で解約することを決めてきました。そうそう、私達は8月31日にカアディスを離れることにしたのです。

8月31日にセビージャ空港からヒースローに飛び、日本から来る友人と合流して、ウェールズの田舎で一週間のナロー・ボートでの旅を楽しむ予定です。その後、ロンドンに戻り、友人と別れてからnのところで4泊して9月13日日本向けです。

日本に着いたら、出来ればその日のうちに長崎入りしたいと思っています。とりあえずはウィークリー・マンションに入って、1ヶ月以内を目処にいよいよ本格的に部屋探しをしようというわけ。なるべく近所付き合いの濃くない市街地が望みですが、そういうところの物件は古く且つ高い、新しいのはもっと高いのが難点です。

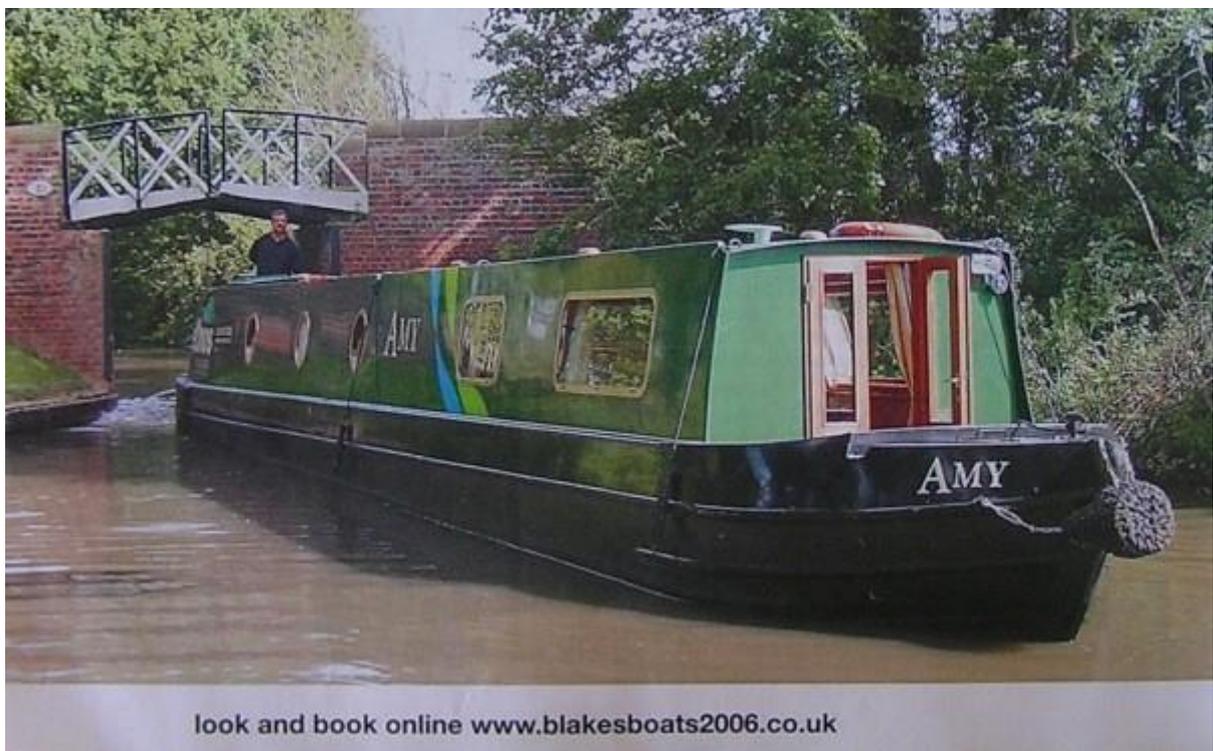
まあ、何とかなるでしょう。そういう点では二人とも至って気楽に構えられるのが唯一のトリエです。ウーン、取り柄というほどのことでもないかな。でも、そうでもなけりゃスペインなどへは来れなかったことも事実です。

そして、電話は8月20日で解約ということにしました。私達は電話使用料はスペインの銀行口座で引き落としにしているんですが、その口座も8月初めの諸引き落としが済んだら解約する予定です。だから最終月の分は現金決済をする必要があり、出発の前日まで使い続けるわけには行かないのです。全てを綺麗に始末つけてから出発したいのです。立つ鳥跡を・・・ということ。

ところで、ナロー・ボートってナンだ、と思う方に簡単に説明したいと思います。  
 ナロー・ボート(narrow boat)とは、文字通り幅の狭いボートのことで、普通は幅  
 7フィート未満、長さ70フィートまでという細長いボートです。

何故そんな形なのかというと、イギリスの古い運河では高低差のある水面に移動する  
 ためのロック(lock=閘門)の幅が7フィートしかないので、其処を通過するためには  
 幅が7フィートより少し狭くないといけないのです。長さの制限も同じ理由です。

ボートはこんな感じのものです。興味をお持ちの方は写真の下のURLでこの種のボ  
 ートのチャーター代理店のサイトをご覧ください。またはR宛にお聞きくださっても結  
 構です。詳しく話すと長くなりますので、ここでは端折ります。



ナロー・ボートとはこんな形のボートですが、内部にはベッド、ソファ、キッチン  
 食卓、バス・トイレ、や什器一切も完備されています。ベッドの数も2から12位  
 まで色々揃っていて、カップルだけでも、数家族のグループでも、何週間でも何ヶ月  
 でもクルーズ可能です。自前のボートに住み着いている人も大勢居ます。

こういうボートをチャーターして好きな所を旅して歩くのです。海運業界用語では裸  
 傭船という言葉を使いますが、それは船だけを裸で、即ち乗組員はナシで借りるこ  
 とを指します。船だけを借りる、一旦借りたらその後の全て、操船や炊事や洗濯や船上  
 生活に伴う全てを自分の責任で行う。誰も助けてくれないし、世話もしてくれない、  
 その代わり、法や規則にさえ触れなければ、ナニをしようとどこへ行こうと勝手気ま  
 ま、というもの。言わばバック旅行の反対の端にある旅ですね。

\*

最低限の決まりはスピードを出しすぎないこと。普通は歩くスピード、時速4マイル程度を推奨されています。このマイルは海里ではなく陸上で使うマイル即ち1.6キロです。如何にゆったりした旅か想像していただけたと思います。

この移動速度の遅さ、それゆえの行動範囲の小ささもパック旅行の反対の極にあります。多分、こういうツアーを企画しても、忙しい日本の観光客にはウケないでしょうね。

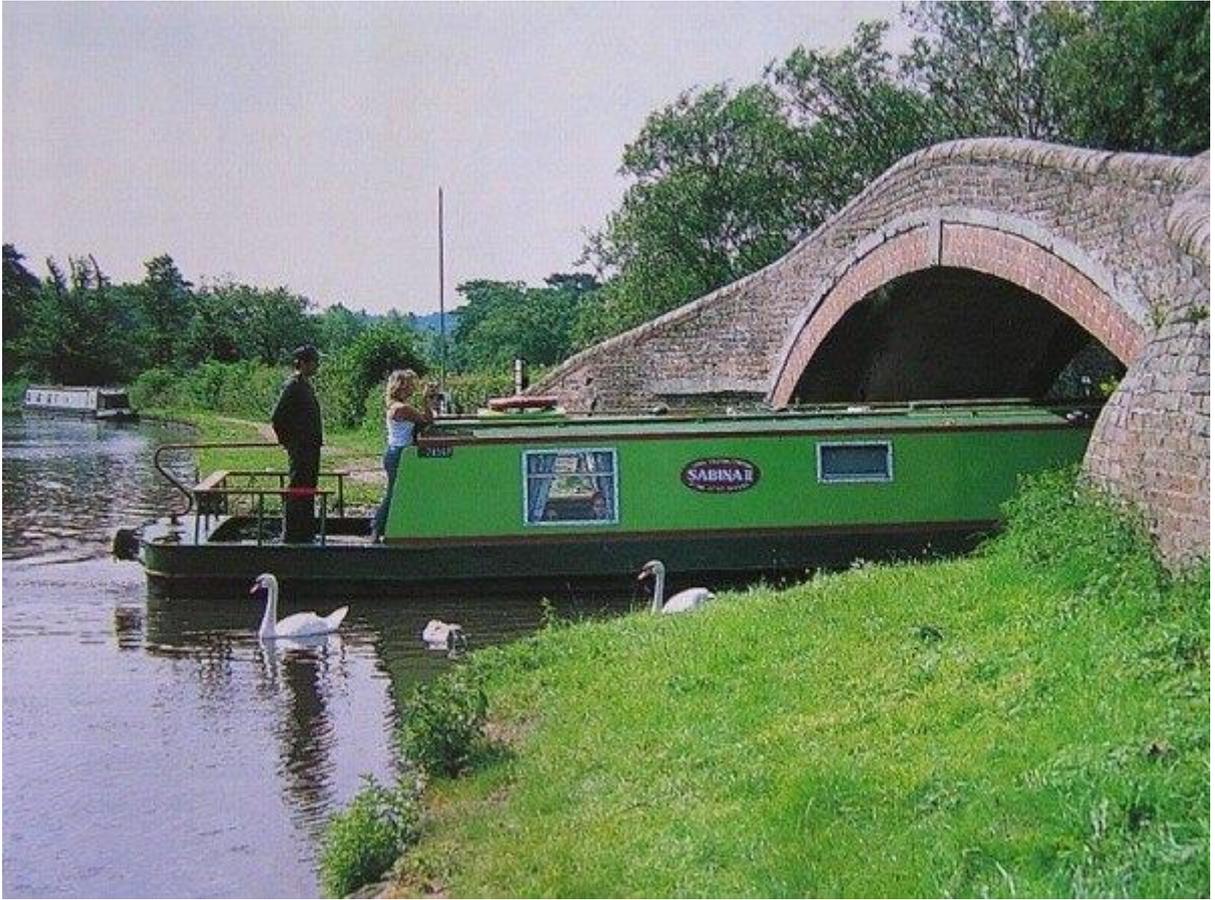
そして、次の2枚の写真のようなノンビリしたイギリスの田園風景の中をゆっくり且つユッタリ旅するのです。車じゃありませんからビールのジョッキを片手にでも、ラッパのみしながらでも、誰にも咎められることはないのです。

\*



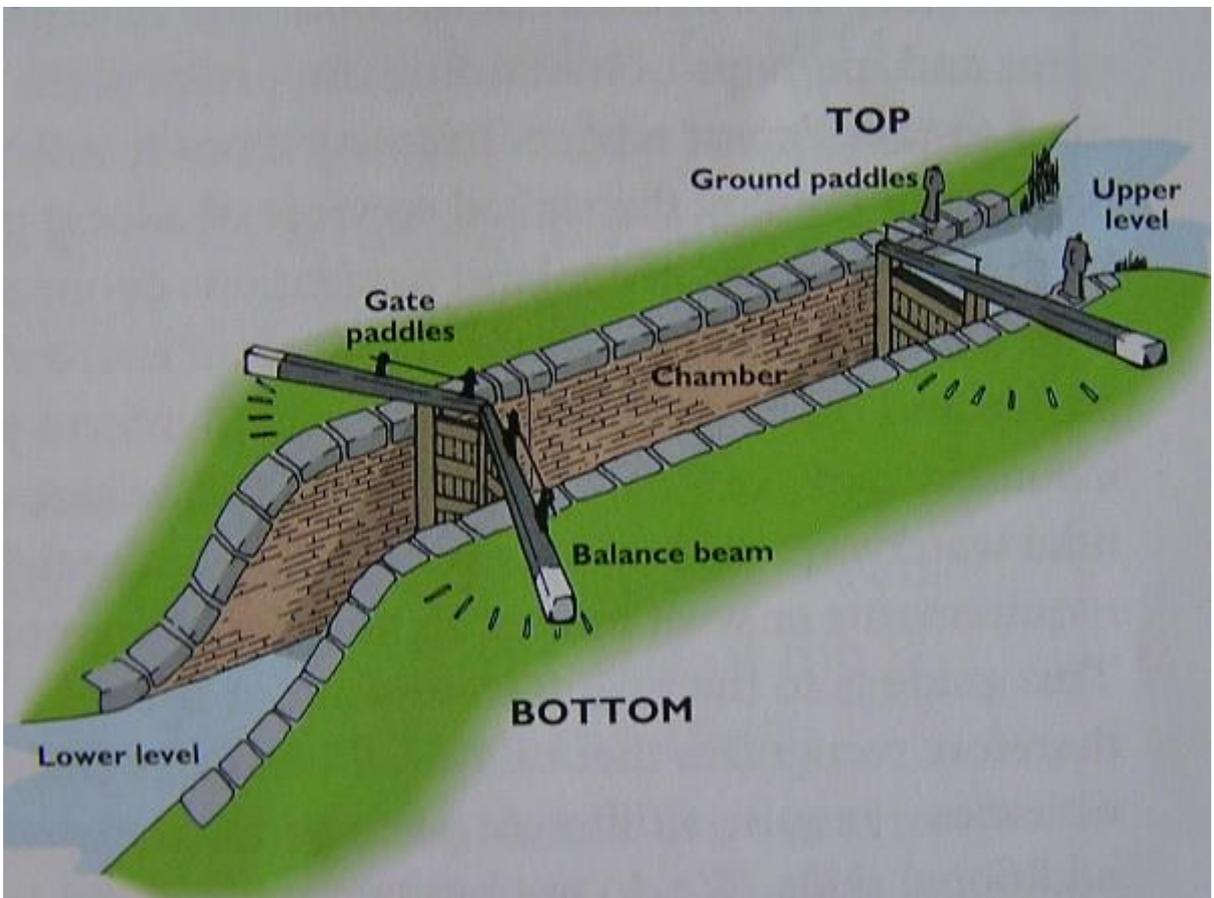
手前の細道をトウ・パス(tow pass)といいます。エンジンなどなかった昔、これでボートを馬に曳かせたのです。今は自然歩道でその専門案内書まで出版されています。

\*



白鳥が浮いていたり、牧場の横を通ると牛や羊が寄ってきたり・・・。

\*



また、ロック(lock=閘門)とはこんな仕掛けです。画面左下の低い水面から右上の高い水面に進むとします。まず下(左)の門(ロック・ゲイト)を開いてボートをロック内に入れます。このとき上(右)のゲイトは閉まっていますから水はそこでせき止められています。だからロック内は低い側の水面と同じです。

ボートをロック内に入れたら下のゲイトを閉じます。そして上のゲイトのそばにある弁を開くと水面の高い側からロック内に水が流れ込み、終には上の水面と同じになります。ロック内と上の水面が完全に一致したら上のゲイトを開きます。こうしてボートは高い水面に出れるわけ。

ゲイトの開閉はバランス・ビーム **Balance beam** というバーを体で押すのです。

逆に上から下への場合はどうするか？

チョット考えてみてください。

この仕組みは、こんな小さいボートのためのものだけではなく、有名なパナマ運河にもこれと全く同じ方式の大掛かりなものがあるのです。世界中に大型船を通すための運河は多数あり、高低差がある所では殆どがこの仕組みと同じものを使っています。

ロックの数が多いので知られた運河はカナダのセント・ローレンス・シー・ウェイ。

数は一つだけどサイズの大きいロックはベルギーのアントワープ港のものなど。こういう作業も全て自分達だけでやる、というところにこの旅の醍醐味があります。

また運河の両側は、牧場あり、田園あり、森や草原あり、大きな町や小さな村落や、

もちろん運河沿いのパブやレストランはボートが横付けするのを待っています。名所旧跡などなくても退屈しませんが、何しろイギリスの田舎は古いものばかり、観光名所も沿線の随所にあり、適当な所へ舳ってチョット足を延ばせばいいんです。

運河そのものも変化に富んでいて、ロックあり、水道橋あり、石橋をくぐったり、跳ね橋を通過したり、長いトンネルに入ったり・・・。

水道橋とは一般道路や鉄道や谷などをまたぐ水路のことで、言うならば大きな樋のようなもの。はるか下に地上を眺めて自分は水に浮いたボートで空中にいる、という異次元体験みたいな気分が味わえます。

\*



このロックは5段連続のものですが、こんな風にくっつかのロックが連続している所をステアー・ケイス(staircase=階段室)と呼びます。

もちろん単独のものもあるし、中には16段連続なんていうすごいものもあります。

私達はこれ迄にイングランド中央部とアイルランドでこのクルーズを楽しみました。

今度のウェールズは三回目になりますが、前二回とも充分満足の旅でした。

ふかふかのベッドも広いバス・タブもありません、雨にでも降られれば操船者は濡れ鼠になってしまいます。食事だって自分で作らなければならない。決して快適そのものというわけには行かない、そんな旅のナニがイイの?という方には無縁の世界。

食事は朝以外は外食で済ますというテもないわけではありません。けれども、何しろ旅の舞台はイギリスですからネー、ソトメシであんまり旨いものは期待できません。

イギリスでは一日に三度アサメシを食え、なんて言われるくらいですからね。

サスガのイギリス人もある程度はそのことは分かっていると見えて、オール・デイ・ブレイクファースト All Day Breakfast なんていう看板を見た事があります。自信を持てるのは English Breakfast だけか。

船を動かすことも、食事作りも全てを自分達の手でやらなければならない、まあ移動キャンプのようなものです。そういえば日本でキャンピング・カーと呼んでいるキャラバンの水上版といいえばそのマンマかもしれません。しかし、やっぱり移動スピードの違いは歴然で、それだけ自然に溶け込み易いとも言えるでしょう。

そして、隠れたメリットは、ベッドをはじめ水上生活をまかなう全ての設備が揃っていますから大勢で利用すると頭割りでは案外安上がりということ。

料金は船の大きさにより季節により各種各様で一口にはいえませんが、夏休みなどのハイ・シーズンは別として4月や11月などのロー・シーズンでは個人旅行をするより安上がりといえるでしょう。(通常12～3月は整備期間で休業の所が多い)

私達は貸し船業者の手先ではありませんが、パック旅行には飽きた、またははじめっからあんなのはイヤという自立心旺盛の方には是非オススメしたいと思います。

\*



7月に入ってから毎週土曜日になると目の前の浜で映画会があります。22時30分開演予定ですが予定通り始まるわけもなく、終演は常に24時を回ってしまいます。

\*

砂浜に寝そべってみる人、ビーチ・チェアを持ち込む人、遊歩道のバルやカフェのテラスから見る人など、さまざまです。普段は浜を真昼のように明るく照らしている照明塔も上映時間中はこの区域だけ消灯。

去年までは夏の間中砂浜に仮設舞台を作っていましたが、今年は新兵器です。スクリーンの回りに黒い枠が見えますね、これはビニール・チューブ、言わば風船の大きなもので、浜にこれを広げておいて空気を入れると自立するんです。それだけでは風が吹くとゆれますから前後左右にロープを張ってゆれ止め対策をしています。

スペインの人達の宵っ張りの度合いは私達も到底太刀打ちできないほどで、1時～2時は宵の口といった風です。この時間既に24時を回っていますが、この通り。

若者や酔っ払いだけでなく、ジーサンもバーサンも大人も子供もバギーのアカンボまでゾロゾロです。アカンボのウチからそんなですから、大きくなってから急にサア早寝早起しろったってできるわけもないですね。そんなこと、言う人もイナイか。

私達はどうせスペイン語吹き替え映画は見ても分かりませんから、いつものとおり浜の散歩です。映画上演中は波打ち際を散歩する人も幾分か少なくて歩き易い。私達が散歩を終えて帰ってきても、マダマダ映画は続いていることが多いです。

外がこんな風だもの、この時間に寝ろったってそうは行きませんねー。浜から帰ったらシャワーをかぶって、ベランダで星を見ながら良く冷えたシェリーを一杯。これがこのところのオキマリです。お陰でシェリーの消費量が格段に増えましたが、まあアト一月少々のことだから許されてもいいでしょう。

ついでにお知らせしておきたいと思いますが、この手紙は7月一杯で終わりとさせていただきます。私達もいよいよ引越し体制に入り何かと身辺整理が忙しくなりました。電話も8月20日までですし、今のメール・アドレスもそれまでとってください。

長崎では出来ればケーブル・テレビの契約をしネット接続もそれで、と思っていますが集合住宅では単独での契約は難しいらしいので、どうなりますか。新アドレスになったら追ってお知らせいたします。

\*

\*

\*



今、カアデイスの街にはこんなポスターが登場しています。欧州各国の帆船がカアデイス港に集結する帆船祭りです。今年は50周年記念とかで特に盛大なものらしい。

案内パンフを見ると大小16隻の訓練帆船が参加するようです。

そのうちの一隻、オランダから参加の **Europa** はRにも縁のある船です。この船の事務局長は20年来の友人レイノウド **Reinoud** 君で、4年前私達がスペインへ移住した年の春、この船が長崎帆船祭りに参加した時、彼に頼まれて船体整備のための修繕ドックの手配と本船側とドック側の連絡係としてお手伝いしたことがあったのです。

今月26日には彼もこの船に乗って入港することになっていて再開を約束しているのです。大いに楽しみにしています。

この友人はRが冷凍船に乗ってカナリー諸島の夏野菜を欧州に運んでいた頃からの知り合いで、その船の運航会社の若手社員だった彼は、毎航海ロッテルダムの港で本船の世話をしてくれていたのです。このカナリーの夏野菜輸送には数年にわたって関わったので彼との交友もそれ以来ずっと続いていました。

2年前に、別の帆船 **Stad Amsterdam** でマラガに入港したときも声をかけてくれて、その素晴らしい船を見せてくれました。  
今度の入港中は色々の行事を抱えているので忙しいだろうとは思いますが、2年ぶりの再会で大いに盛り上がることでしょう。日本に来た時の乗組員の何人かがまだ乗っているかも知れず、それも楽しみです。

その他、イギリスからは **Lord Nelson** という船が参加します。障害のある人でも帆船体験を出来るように造られた素晴らしい船です。

この船は2年前我が家に滞在したマーク **Mark** さんという人が船長をしていた船で、Rが日本の帆船・海星のナビゲーターとしてお手伝いしていた時、彼もセーリング・マスターとして乗船して友達になりました。今はもう引退した彼が長年船長として乗っていた船の内部を見たい。

なお、このポスターの船はスペイン海軍の練習船 **Juan Sebastian de Elcano** という船ですが、日本にも来たことのあるチリ海軍の **Esmeralda** という船と同型の姉妹船で、現在では数少ない **Four-masted Topsail Schooner** という帆装の船です。このポスターでは白いセイルを張っていますが、ライト・グリーンセイルを張ることもあり、数多い帆船の中でもひととき人目を引く美しい船です。

26日にはファン・カルロス国王夫妻をむかえての開会式が行われる予定です。私達も24～5日から双眼鏡を手にベランダから各船が入港してくる西の海の見張りを続けることになるでしょう。次号最終号は帆船特集です。乞ご期待。

\*\*\*

---